

# いじりといじめについて

マスコミュニケーションゼミナール 1313045 谷口 直哉

## 1.研究目的・研究動機

筆者は教職に就くことを将来の目標としている。教職の学習を進めるなかで、今日の学校現場は「学びの場」として教科を教えるのみでなく、学校内外の児童・生徒の生活に配慮、注力することが求められていることを再認識した。このうち、学校外の生活については、家庭内の虐待や不登校などであり、学校内の生活については不登校の原因の一つである教員による体罰や生徒間のいじめが今日、大きな問題となっている。中でも教職に就くにあたって絶対に避けることができない問題が、いじめの問題であると考えられる。

筆者はこれまでスポーツを始めとして多くの組織に所属してきたが、どこの組織においても「いじり」は必ず行なわれていた。また筆者もいじられた経験、いじった経験の双方を持つ。多くの場合、「いじり」は上級生が下級生に対して行なわれており、先輩とのコミュニケーションの一つとして機能していた。しかし「いじり」の度が過ぎたことによりいじられた人が心身の苦痛を訴えている場面も何度か目にすることがある。このことから「いじり」と「いじめ」の境を知ることはいじめを減らすことにもつながり、よりよい人間関係を築く基礎となると思い、卒業研究のテーマとした。

## 2.研究方法

アンケートによる調査を千葉県内のI塾の中学校生徒の男子女子の合計60名に行った。質問内容は大きく4つの項目があり「言葉に関するいじめといじりについて」「身体的な暴力に関するいじめといじりについて」「性格について」「いじめといじりの境目について」調査を行った。調査実施の2週間前に塾長に連絡をとり、調査の依頼と調査の報告を行った。質問内容と目的を説明したところ非常に興味を持っていただき快く受け入れてくださった。2016年9月6日に依頼し、同年10月13日にすべての質問紙を受け取った。

## 3.主な結果と考察

悪口における集計結果から総合的に見て、いじりの頻度が多いといじめだと感じてしまう可能性が高くなるといえると解釈できた。一方で「全くない」と回答した人が多い割には直接聞いた会話での様子から、中学生は仲の良い程相手の言葉を聞き流すことができたり、うまく対処できることが可能であると理解した。しかし悪口がエスカレートし、いじめに

つながってしまうリスクがあることが分かったので中学生にはこれからはコミュニケーションの取り方を工夫させるように助言する必要がある。暴力のいじりの結果では総合的に見て、男子は細かい身体的接触に気にすることがあまりないということが分かった。また、上下関係による結果から、上下関係による身体的な接触は外傷以上に内面的にダメージを受けるためいじめと転換する可能性が高くなるのではないかとということが分かった。さらに身体的な攻撃による上下関係には有意差から男女間に差がなく、言葉ではあった男女間のずれが身体的接触ではあまり生じないことから、上下関係のいじりの形態を左右しているのは言葉なのかもしれない。性格による調査を行ったところ性格はからいじめと感ずるほどのいじめやすい人は、性格ではあまり左右されていないということが分かった。境について最も気にしている点は行為人数であるということが分かった。

#### 4.結論

今回の調査を通していじりといじめは紙一重であった。冗談であるいじりとしていても頻度を重ねればいじめと化してしまう恐れがあることや対象が誰かによってもいじりの強度が変わり、もし被害者にとっていじられている条件が悪いといじめとなるスピードが速くなるからである。またこの国における特徴でもある集団による行為が最も影響を与えているということを特に注意しなければならないと気付かされた。いじりといじめの境を今回の調査で明確に出すことは難しかったが、いじりは誰もが被害者となることがあり得るものであり、さらに男女の感じ方に違いがあるものもあるという結論に至った。

#### 5.卒業論文の執筆を終えて

今回のテーマであるいじめについては教職に就こうとしていることから多少の知識はあったと思われたがいじりといいういじめとは少し違った側面に触れることができ今後につなげることのできる論文になったと思う。今回の対象は塾に通っている生徒であったため人数の確保が困難だったことが反省点であった。今後この論文を発展させ学校規模で調査を行うとより明確な結果が生まれるかもしれないので継続して調査を試みようと思う。